

野村恒彦

日本数学史学会編、『数学史事典』、2020年10月、丸善出版

「ケンブリッジ・トライポス」「ミステリーの中の数学」「ルーカス教授職」の項目を執筆。

一般的に数学史に関する事典は、通史的な視点による項目が設定され、時系列に記述されているものと考えられるだろう。すなわち具体的な話題としては数学の分野ごとの歴史や、著名な数学者の略歴や業績を紹介しそれらの数学史的位置づけがなされるという観点から記述されるというものである。

今述べたような視点とは別の観点から編纂されたのが本書『数学史事典』である。その視点を具体的に点検するには、本書の目次を見ると一目瞭然である。本書は全部で15の章から成っているが、それらは次のようになっている。

第1章「世界各文化圏の数学史」、第2章「日本の数学史」、第3章「数の歴史」、第4章「代数学史」、第5章「幾何学史」、第6章「解析の数学史」、第7章「論争の論理の数学史」、第8章「確率・統計の数学史」、第9章「計算法と計算器具の歴史」、第10章「天文・暦学史」、第11章「科学への応用」、第12章「数学思想史・数学教育史」、第13章「数学書の歴史」、第14章「数学パズル史」、第15章「社会の中の数学」

前述した通史的な論点は第1章から第3章に含まれ、分野ごとの歴史は第4章から第8章までにあたる。しかし、第9章以下第15章までは従来の数学史の視点には見ることができなかつたものだろう。さらに注目すべきは、章題だけではなく各章に含まれる項目名も独自のものになっている点である。二、三例を掲げてみよう。第11章での「弾道学」、第12章の「数学の発見法」、第13章「失われた数学書」、「数字の語呂合わせ」、「ワインと数学」などが容易に見つけることができる。

このような独自の視点を基にした事典での3項目を執筆させていただいたが、このうち「ミステリーの中の数学」という項目は、従来のこの種の事典では前例がないものである。その中ではミステリーにおいて数学がどのような使われ方をしているのかという点に焦点をあてている。それらのうちの一つは「論理的思考」であり、もう一つは「数式という表現形式」である。前者は探偵が犯人を推理する過程において重要な役割を果たしている論理的思考を数学と関連して述べたものである。後者は推理を進めていく中での表現形式として数学が使用されているということについて述べている。それは小説が展開していく中での装飾として数学が使用されていたり、説明のために具体的な数式が使用されたりすることを意味している。